

仏神宗
仏神寺柳山神社

お宮参り・七五三の儀

高皇產靈大御神

天之御中主大御神

神皇產靈大御神

瓊瓊杵尊

天照大御神

柳山大山祇大山神

不動明王

大日如來

遍照金剛

[illegible]

目次
主祭神仏宝号

第一節 お宮参り・七五三の儀 勤行	一
清祓式開場祝辞祝詞（きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと）	二
修祓の儀（しゅばつのぎ）	二
お宮参り・七五三の儀開始祈念（かいしきねん）	三
降神の儀（こうしんのぎ）	四
降神の儀（こうしんのぎ）	六
大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』	七
大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）	七
産土神祓祝詞（うぶすなのかみのはらいのりと）	九
天津祝詞（あまつのりと）	十一
祓祝詞（はらへのりと）	十二
祓祝詞（はらえのりと）	十四
神言（かみごと）言霊の大祓い	十五
言霊賛祝詞（ことだまたたえのりと）	十七
大祓祝詞（中臣祓）（おおはらいのりと（なかとみのおはらい））	十九
（ホツマ伝え）天津祓（あまつはらえ）	二十四
天津祓（あまつはらえ）	二十五
天津祓 吐普加美依身多女の意味	二十六
天津祓（あまつはらえ）	二十八
国津祓（くにつばらい）	二十八
蒼草祓（ひとあおぐさのはらい）	二十八
延命十句観音経（えんめいじゅつつかんのんきょう）	二十九
三力の偈（さんりきのげ）	三十一
回向文（えこうぶん）	三十一
お宮参り・七五三の儀終祈念（しゅうきねん）	三十二
神前に、捧げる御饌の種類	三十三
仏神宗仏神寺柳山神社 由来	三十四
著作権侵害について	三十七
出版社 出版日	三十八

第一節 お宮参り・七五三の儀 勤行

清祓式開場祝辞祝詞

(きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと)

かけまくも かしこき はらひどの おおかみと たたえことを へまつる
 せおりつひめのかみ はやあきつひめのかみ いぶきどぬしのかみ
 はやさすらひめのかみ よはしらを はじめまつりて
 あまつかみ やおよろずくにのかみ やおよろずこれの はらひわざを
 たいらけく やすらけく きこしめせと かしこみ かしこみも まをす。

修祓の儀

(しゅばつのぎ)

はら ぐし
 祓い串で、かんけいしや
 関係者を祓い、かいじょうぜんたい
 会場全体を祓う。はら

▲記号が表示されていたら、光明真言を三遍復唱する事

かいしきねん

開始祈念

※別紙 記載あり

先ずは神様をお呼びする。

降神の儀（こうしんのぎ）

二拝 九拍手

※二拝九拍手（祈念）一拝は、最高神、天之御中主大御神様に捧げる最も良い数である、九は最高の数であるがゆえに、最高神を呼ぶのに最も良い数、九回の拍手打つ。

本当の御名前は、ミナカヌシ様ですが、アメノ、アマノは、総称です。

アメノミナカヌシオオミカミ、アマノミナカヌシオオミカミと呼ばれているが、どちらも正解の呼称であります。アマノミナカヌシオオミカミと唱えても、ミナカヌシと唱えても効果あり。

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

とゆつくり三回唱え、

み	み	み
な	な	な
か	か	か
ぬ	ぬ	ぬ
し	し	し

とゆっくり三回唱えて、唱えた後に、

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

一 拜

降神の儀（こうしんのぎ）

二拝 二拍手

うぶすなのおおみかみ
うぶすなのおおみかみ
うぶすなのおおみかみ

とゆつくり三回唱え、唱えた後に、

○オーと、一息でゆつくり唱える。

○オーと、一息でゆつくり唱える。

○オーと、一息でゆつくり唱える。

一拝

大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）「げんだいごやく」

言葉に掛けて、申し上げるのも、恐れ多い、天地根源の神様で在らせられる、天之御中主の大御神、高皇産靈の大御神、神皇産靈の大御神達の、不思議で絶妙な、御恩恵によって、この世に生まれ出てきた、我々の、身の上ならば、その御恩恵に、報い奉ろうとして、御称え、申し上げますには、いよいよ高く、底知れぬ、天上界の、幽界を、主宰され、始めもなく、終わりもなく、盤石に、永遠に、御鎮まりになられて、目には見えない、根源のエネルギーは、百種類に近い、神のエネルギーを、生じ給い、目に見えるものは、昼の世界、夜の世界を、主宰され、またこの地球にあっては、現代を、生きる人を始め、呼吸をする生き物も、呼吸をしない物も、この世に、ありとあらゆるものの限りを、生み出し給い、支配され、御守り下さり、幸をお与え下さる、ご功績の、偉大で、悠久で、広くて、厚い、大きな愛情を、蒙って、この現世に、生きている限りは、大御神様達の、元となる、御心そのままに、この真心を尽くさせて、頂いて、怠慢にならず、尊敬し、畏怖の気持ちで、お仕える様子を、御心も穏やかに、お聞き下さいまして、全世界の人々を、天地の神理に違わず、開けた世の中に、後れることなく、さまざまな災難が無く、つつがなく、存在させて下さり、夜も、昼も、昼夜分けず、御守り、御恵み下さり、幸をお授け下さい、と、大空を、遙かに、拝ませて、頂きます、と、申し上げます。

大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）

※この祝詞は神前でも唱え、無形の空を仰ぎ奏上する祝詞です。

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみたちの くすしく たえなる

みたまの ふゆによりて この うつしよに あれいでたる みにし あれば

そのもとつ みめぐみに むくい たてまつらむとして

ただへごとを へまつらくは いやたかく そこひなき

たかまのはらの かくりよを しめ たまひ

はじめもなく おわりもなく ときはに かきはに しづまり まし まして

めにみえぬ もとつけは ももたらず やその かみけを なし たまひ

めにみゆるものは ひのみくに つきのみに ほしのに
またこれの おおつちに ありては

うつしき あおびとくさを はじめ いきあるも いきなきも よにありとし
あるものの かぎりを うむしいで うしはき まもり さきはえ たまえる
みいさおの おおき ひさしき ひろき あつき おおむ いくしみを
かがふりて このうつしよに あらむ かぎりは

おおみかみたちの もとつ みこころの まに まに

この こころを つくして うむことなく

この みを つとめて おこたる ことなく

うやまひ かしこみも つかえまつる さまを たひらけく やすらけく
きこしめして よよのくにの あおびとくさをして

あめつちの かみわざに たがは しめず ひらけ よにおくれ しめず
くさぐさの わざわいなく つつがなく あらしめ たまえ

よのまもり ひのまもりに まもりめぐみ さきはえ たまえと

みそら はるかに おろがみ まつらくと もおす。

産土神祓祝詞

(うぶすなのかみのはらいのりと)

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみ

かけまくも かしこき あまてらす おおみかみ うぶすなのおおかみ

ちんじゅのおおかみを はじめ

いとも ありがたき わがしゅごの ごそんざい たちの

おおまえを おろがみ まつりて かしこみ かしこみも まをさく

おおかみさま ぶっそん たちの

たかき とうとき こうみようを いつも いただき

ひろき あつき みたまのふゆと ごぶつとくを

うみの この いや つぎつぎに たまわり めぐみ たまひ

われは てんちしぜんの どおりにしたがい おかげさまの ところを もちて

われの じんせいを たいせつにして われとかぞくを ねぎらい

はげまし かんしゃして ところに えいようを あたえ

なりわいに はげみ てんしよくに ならしめ たまひ

わが いちれい しこんと ところが いや ますますに

せいちょうし ようじょうし ところがけ みすこやかに

よろづの ねがうこと かなえ たまひ

うぶすなの しんぶつは ゆうけん ちようわの しんぶつにて

うつしよを さりぬ のちは たかき れいかいに はいらしめ たまひ

じょうどへと みちびき たまひ

うつしよも かくりよも たのしみ よろびの かわる ことなく

みこころも なごやかに きこしめして まもり めぐみ さきはへ たまひ

いへかど たかく いやたかに いやひろに さかえしめ たまふ ことを

いんよう ちようわ された うつくしき だいしぜんの ちきゅう じんるいの

へいわ はってんの ために つくさしめ たまひ

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろづの かみたたちと ともに

きこしめせと かしこみ かしこみも まをす

天津祝詞（あまつのりと）

たかまのはらに かむづまります

かむろぎ かむろみの みこと もちて

すめみ おやかむ いざなぎの みこと

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに

あれませる はらへどの にじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろずの かみたちと ともに

あまの ふちごまの みみ ふりたてて

きこしめせと かしこみ かしこみ もおす。

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらえのりと）

かけまくも かしこき いざなぎの おおかみ

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに なりませる

※山吹色文字は、読まない、※黒文字だけ読むこと。

※衣服を脱いだ時に成った神々

※杖 つきたつ ふなとの かみ

※帯 みちの ながち はの かみ

※袋 とき おかしの かみ

※衣 わつら ひの うしの かみ

※袴 ちまたの かみ

※冠 あきぐひの うしの かみ

※左腕輪 おきぎかるの かみ

※左腕輪 おくつ なぎさびこの かみ

※左腕輪 おきつ かひべらの かみ

※右腕輪 へぎかるの かみ

※右腕輪 へつ なぎさびこの かみ

※右腕輪 へつ かひべらの かみ

※潮流の中流で清めた時に、黄泉の国の穢れから成った神々

やそ まが つひの かみ おお まが つひの かみ

※その禍を直すために成った神々

かむな おひの かみ おおな おひの かみ いづの めの かみ

※潮流の底で清めた時に、成った神々（上記三神Ⅱ綿津見三神 下記三神Ⅱ住吉三神）

そこつ わたつみの かみ そこつ つのおの かみ

※潮流の中程で清めた時に、成った神々

なかつ わたつみの かみ なかつ つのおの みこと

※潮流の表面で清めた時に、成った神々

うわつ わたつみの かみ うわつ つのおの みこと

※最後に顔を洗った時に成った神々（三柱のうずのみこⅡ三貴子）※黙読する事。

※左目 あまてらす おおみかみ ※右目 つくよみの みこと

※鼻 たけはやすさのおの みこと

はらえど よはしらのかみたちと ともに もろもろの まがこと
 つみ けがれを はらひ たまひ きよめ たまふと もうす ことを
 きこしめせと かしこみ かしこみも もおす

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらへのりと）

かけまくもかしこき いざなぎのおおかみ
つくしのひむかのたちばなのおどの

あわぎはらにみそぎはらひたまひしときに

なりませるはらへどのにじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみけがれ あらむをば

はらひ たまひ きよめ たまふと まをす ことを

きこしめせと かしこみ かしこみも もお

神言（かみごと）

※言霊の大祓祝詞

たかあまはら おのころに かみづまります

すめむつ かむろぎ かむろみの みこと もちて

ち よろづの かみたちを かむつどへに つどへ たまひ

かみはかりに はかり たまひて

したつ いわねに みやばしらふとしきたて

たかあまはらに ちぎ たか しりて

いづの かむたからの おおみこころの まにまに

あまつ かなぎを もとうちたち すえうちたちて

ちくらに おきくらに おき たらはして

あまつ すがそを もとかりきり すえかりきりて やはりに とりさきて

あまつのりとの ふとのりとを のれー、

「むーひと ふた みーよー いつ むゆ なな やー ここの たり ももち よろづ いろはにほへ とー（強）

かなながら たまちはへませ かなながら たまちはへませ

ひふみ よいむなや

こともちろらね

しきる

ゆゑつわね

そをたはくめか

うおゑ

にさりへて

のますあせえほれけ

ふるべ ゆらゆらと ふるべ

とほかみえみため

きのえ きのと ひのえ ひのと つちのえ つちのと かのえ かのと みずのえ みずのと

はらひ たまひ きよめで たまふ

とほかみえみため

ねうし とらう たつ みうま ひつじ さる とり いぬ い

はらひ たまひ きよめで たまふ

とほかみえみため

かん こん しん そん り こん だ けん

はらひ たまひ きよめで たまふ

はらひ たまひ とほかみえみため

きよめ たまふ とほかみえみため

めぐみ たまふ とほかみえみため

おーおーおー

タカアマハラ ナヤサー

かくのらば かみがみは おのも おのもの いわとを おしひらきて
 いづの ちわきに ちわき たまひて きこしめさむ かく きこしめしては
 あめのくに うつしくに ともに つみと いふ つみは あらじと
 しなどの かぜの ふきはなつ ことのごとく

あさかぜ ゆうかぜの ふきはらふごとく

おおつべにいる おおふねを へときはなち ともときはなちて

おおうなばらに おしはなつ ことのごとく

のこる つみも けがれも あらじと

はらひ たまひ きよめ たまふ ことを

よしはらへ あしはらへ たまひて いやさかの みよとこそ

さきはへ たまえ さきはへ たまえ。

言霊賛祝詞

(ことだまたたえのりと)

かけまくも あやに かしこき おおみかみは

かくり みにして ことだまに かよい あらわれ たまう

ことだまは ありて ある とわの いのち ひかりなり

「ん」の ちちに ゆわえ

「あいうえお」の ははに ひらき

「ぬ・ふ」を みなかとして こに うまれ

いつつとうねをつくるともに やみに まよい うめきて あれくるうなり

これひとえに われの なせし おこないの むくい おのの えにしによる

あらわれ なりと みたまたちは ふかく かえりみ はちくい おそれ

さとりて おおみかみの みちからにより すみやかに つみ げかれを

やきはらい あらい きよめ たまえ

あめつちは

「きまる」の みよを むかえ みろくの みよを あらわすため

みくきの くにの みたまを ときをとおし ひとつに つらぬき ゆわえ たまう

おおみこころにより いま みたまたちは おおみかみの

み すくい み いつくしみを うるの ときに あえるなり

このゆえに かくりよにます ひとの みたま もろもろの みたまは
 まなこを ひらき おのも あわせ はなれて ことの はの あやとなり
 たま ものを とおし もちろんの かきもの おしえになり
 ちえを あたう

ことだまは あめつちに みち よもに かよい むかしより
 とわに いき とおす

ひとは ことだまに よりて たまおきの つとめを はたし
 ことだまの ますみに すみきる とき

もと ひとつの おおみかみに つらぬきて みな かよう

「ことだまは かみなり かみは ことだまなり

ことだまは さきはえ たまえ さきはえ たまえ」

と たたえことを かしこみ かしこみも もおす。

大祓祝詞（中臣祓）

（おおはらいのりと（なかとみのおはらい））

※大祓いは節目節目で読むと良い祝詞です。（6月30日・12月31日）

たかまのはらに かみづまり まします

すめらがむつ かむろぎ かむろみの みことを もちて

やおよろづのかみたちを かむつどへ つどへ たまひ

かむはかり はかり たまひて

わがすめみまの みことは とよあしはらの みづほのくにを

やすくにと たいらけく しろしめせと こと よさし たて まつりき

かく よさし たて まつりし

くになかに あらぶる かみどもをば かむとはしにとはしたまひ

かむはらひに はらひ たまひて こととひし

いわねきねたちくさの かきはをも ことやめて

あめの いわくらはなち あめの やへぐもを いづの ちわきに ちわきて

あまくだし よさし まつりき かく よさし まつりし よもの くなかと

おおやまと ひだかみの くにを やすくにと さだめ まつりて

したつ いわねに みやばしら ふとしき たて

たかまのはらに ちぎ たかしりて

すめみまの みことの みづの みあらか つかへ まつりて

あめのみかげ ひのみかげと かくれまして

やすくにと たいらけく しろしめさむ くなかに なり いでむ

あめのます ひとらが あやまち おかしけむ くさぐさの つみごとは

あまつ つみと あぜはなち みぞうめ ひはなち

しきまき くしさし いきはぎ さかはぎ くそ へ ここだくの つみを

あまつ つみと のりわけて くに つみ とは

いきはだたち しにはだたち しろ ひと こくみ

おのが ははおかせる つみ おのが こおかせる つみ

ははとこと おかせる つみ ことははと おかせる つみ

けもの おかせる つみ はうむしの わざわい たかつ かみの わざわい

たかつ とりの わざわい けもの たふしまじもの せる つみ

ここだくの つみ いでむ かく いでは

あまつ みやごともちて あまつ かなぎを もとうちきり すえうちたちて

ちぐらの おきくらに おきたらはして

あまつ すがそを もとかりたち すえかりきりて やはりに とりさきて

あまつ のりと の ふとのりと ごとを のれー

「むーひとふたみーよーいつむゆななやーここのたり
ももちよろづいろはにほへとー（強）」

かなながらたまちはへませ　かなながらたまちはへませ・・・

ひふみよいむなやこともちろらね　しきるゆるつわぬそをたはくめか
うおゑにさりへてのますあせえほれけ　ふるべ　ゆらゆらと　ふるべ・・・

とほかみえみため

きのえきのとひのえひのと　つちのえ　つちのと　かのえ　かのと　みずのえ
みずのと　はらひたまひきよめでたまふ

とほかみえみため

ねうしとらうたつみ　うま　ひつじ　さる　とり　いぬ　い
はらひたまひきよめでたまふ

とほかみえみため

かん　ごん　しん　そん　り　こん　だ　けん

はらひたまひきよめでたまふ

はらひたまひとほかみえみため きよめたまふとほかみえみため
めぐみたまふとほかみえみため……

おーおーおー タカマノハラ ナヤサー」▲

かくのらば あまつ かみは あめの いわとを おしひらきて

あめのやへぐもを いづの ちわきに ちわきて きこしめさむ

くにつ かみは たかやまの すえ ひきやまの すえに のぼりまして

たかやまの いほり ひきやまの いほりを かきわけて きこしめさむ

かく きこしめしては つみという つみは あらじと

しなとのかぜの あめのやへぐもを ふきはなつ ことのごとく

あしたのみぎり ゆふべのみぎりを

あさかぜ ゆうかぜの ふきはらふ ことのごとく

おおつのべに いる おおふねを へときはなち ともときはなちて

おおわだのはらに おしはなつ ことのごとく

おちかたの しげきが もとを やきがまの とがまもちて

うち はらふ ことの ごとく

のこる つみは あらじと はらひ たまひ きよめ たまふ ことを
たかやまのすえ ひきやまのすえより さくなだりに おち たきつ
はやかわのせにます

せおりつひめというかみ おおわだのはらに もち いでなむ
かく もちいで いなば

あらしおの しおの やおぢの やしほぢの しおの やお あいに ます
はやあきつひめというかみ もち かかのみてむ かく かかのみては
いぶきとにます

いぶきとぬしというかみ ねのくに そののくにに いぶきはなちてむ
かく いぶきはなちてば ねのくに そののくにに ます

はやさすらひめというかみ もち さすらい うしない てむ
かく うしないてば きようより はじめて つみという つみは あらじと

はらひ たまひ きよめ たまふ ことを

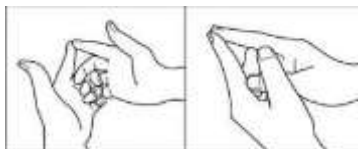
あまつ かみ くにつかみ やおよろずの かみたちと ともに
きこしめせと もうす。

(ホツマ伝え) 天津被 (あまつはらえ)

※「とほかみゑひため」の言霊は、願望実現の為の究極の言霊である。一切の罪穢れを被い、福寿をもたらす大被詞の秘詞である。

とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため

天津被い方位別唱え言葉



左図の様に鎮魂印を結ぶ

いちれいかんほど

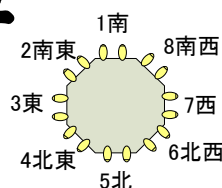
と 一靈感程

1、南を向き

きいつ

み 帰一

2、南東を向き



げんきまんしん

た 元気万進

3、東を向き

かいき

ほ 回歸

4、北東を向き

いっさいまんぎょうしん

ゑ 一切萬行進

5、北を向き

まんぼう

め 萬寶

6、北西を向き

せいめいじょうずほど

か 生命成就程

7、西を向き

しよえん

ひ 所縁

8、南西を向き

※図表に沿って、方位別に唱え言葉を唱える事。

とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため とほかみゑひため

天津被（あまつはらえ）

※「とほかみえみため」の言霊は、願望実現の為の究極の言霊である。一切の罪穢れを被い、福寿をもたらす大被詞の秘詞である。

とほかみえみため

はらひたまひとほかみえみため

きよめたまふとほかみえみため

めぐみたまふとほかみえみため

はらひたまひとほかみえみため

きよめたまふとほかみえみため

めぐみたまふとほかみえみため

（二十遍唱える）

とほかみえみため

祈念

これから、『住所』『生年月日』『氏名』が、

じゅうしょ

せいねんがつび

しめい

のぞ

ねがごと

望む『願い事』が、

かみさま

きせき

ちから

神様の奇跡の力によって、『氏名』に与えられました。

しめい

あた

ふか

こころ

かんしや

深く心より感謝します。有難うございました。

ありがと

天之御中主大御神様

いつも奇跡の力で、私に恵みを頂き、誠にありがとうございます。（三遍）

【と】水の神 【ほ】火の神 【かみ】木の神 【えみ】金の神 【ため】土の神

『と』全ての事が成っていく象意、先も安定 『ほ』水蒸気が立ち上がる勢いのある象意

『か』陽気、運氣強く盛ん、神の助けあり 『み』物事が始まる象意

『え』陽気盛んで、幸運を得る象意 『た』木の行き通う象意、男女の愛和

『め』ものの象意をそのまま表す象意

と言われる。はらいたまえ、きよめたまう、めぐみたまう、を別にして、とほかみえみためを唱える回数、二十一回とか四十回唱えないといけないと言われるが、私が思うに、人には、五人の守護霊つまりは魂の兄弟がいるので、五人×九回＝四十五回十ゆつくりと自分の分一回の合計五十四回唱えないといけない。つまりは、自分を守ってくれている魂に捧げるのである。葬儀、年忌の場合は、その人がお亡くなりになり、六人があの世に行っている状態なので、六人×九回＝五十四回同じ速さで唱える。ようは、誰の為に、とはかみえみためを唱えるのかによって、速さや唱える回数が違ってくる。

とほかみ とは、

とほつみおやかみ せんぞがみ
遠津御祖神（先祖神）

と かみ ことあまつかみ くにう かみ さんきし
十の神（別天津神・国生みの神・三貴子）

ことあまつかみ あまのみなかぬしおおみかみ たかみむすびおおみかみ かむみむすびおおみかみ
別天津神とは、天之御中主大御神・高皇産靈大御神・神皇産靈大御神・

うましあしかびひこぢかみ あまのとこたちかみ
宇摩志阿斯訶備比古遲神・天之常立神

くにう かみ いざなみのみこと いざなぎのみこと
国生みの神とは、伊邪那美之命・伊邪那岐之命

さんきし あまてらすおおみかみ つくよみのみこと すさのおのみこと
三貴子とは、天照大御神・月読之命・須佐之男命

えみため とは、

感謝しています。微笑んで下さい。

とほかみえみためとは、御先祖の神様、十の神様、感謝しています。
微笑んで下さい。となる。

天津祓 (あまつはらえ)

吐 普 加 美 依 身 多 女

(三返)

国津祓 (くにつばらい)

寒 言 神 尊 利 魂 陀 見

(三返)

蒼草祓 (ひとあおぐさのはらい)

波 羅 伊 玉 意 喜 餘 目 出 玉 登

(三返)

あまのみなかぬしおおみかみさま

ただい

きせき

ちから

も

天之御中主大御神様、多大なる奇跡の力を以って、

かいじよう

みなさま

いのち

この会場におられる、皆様の、命の、ともしびが、

かのう

かぎ

えんめいいた

よう

可能な限り、延命致します様に、

えんめいじゅつくんのんきよう

どつきよう

くどく

延命十句観音経を読経し、その功德と、

しんぶつ

かじりき

も

あまね

いつさい

およ

われら

しゅじよう

神仏の加持力を以って、普く一切に及ぼし、我等と衆生

みなとも

きねんいた

と、皆共に、祈念致します。

えんめいじゅつつかんのんきよう

延命十句観音経

かんぜーおん なーむーぶつ よーぶつうーいん よーぶつうーえん
 ぶつぽうそうえん じょうらくがーじょう ちようねんかんぜーおん
 ぼーねんかんぜーおん ねんねんじゅうしんきー ねんねんふーりーしん。
 ▲

延命十句観音経

えんめいじゅつつかんのんきよう

かんぜーおん なーむーぶつ

よーぶつうーいん

よーぶつうーえん

ぶつぽうそうえん

じょうらくがーじょう

ちようねんかんぜーおん

ぼーねんかんぜーおん

観世音 南無仏 与仏有因

与仏有縁

仏法僧縁

常樂我常

朝念観世音

暮念観世音

ねんねんじゅうしんきー

ねんねんふーりーしん

念念従心起

念念不離心



さんりき げ

三力の偈

以我功德力

神仏加持力

及以法界力

普供養而住



(我が功德力、神仏の加持力、法界力、供養の心を持って広く普く周辺に供養を及ぼす心を保ちます。)

えこうぶん

回向文

願以此功德

普及於一切

我等與衆生

皆共成神仏道



(願わくは、此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に神仏道を成ぜんことを。)

しゅうきねん

終祈念

※別紙

記載あり

しんぜん
神前に、
ささ
捧げる御饌の種類
みけ
しゅるい

やま
山の物
もの

こめ
お米・
みき
お神酒・
みず
お水・
くだものるい
果物類・
やさいるい
野菜類

うみ
海の物
もの

しお
お塩・
たいにひき
鯛二匹・
こんぶ
昆布・
ほか
その他

仏神宗 仏神寺 柳山神社 由来

創設者、松永行秘は、三二歳の一九九七年（平成九年）からの夢の師匠に出会い、色々な事を学んだ。

二〇〇二年（平成十四年）五月十日に、羽島の悟入寺の山崎静雄住職から戒を授かり、曹洞宗において得度し、大日如来を本尊とする、仏心宗なるものを考え修行に励み、非営利団体 国際人権擁護協会を設立し、相談者の、救済に取り組んできた。

夢の師匠、守護霊、仏様を感じて、人権擁護活動をし、家では、天照大御神（あまてらすおおみかみ）、産土の大神は勿論、形だけ祀って、大日如来、不動明王を中心に祀り、ほとんど祈る事はなかった。

二〇一九年（平成三一年）頃より、言霊、神様という觀念に襲われ、この大宇宙の、最高神で在られる、

創造神で、造化三神の、天之御中主大御神（あまのみなかぬしおおみかみ）、高皇産靈大御神（たかみむすびおおみかみ）、

神皇産靈大御神（かむみむすびおおみかみ）様達を新たに招神し祀り、そこに、柳山大山祇大山神（やなぎやまおおやますみおおやまがみ）様を招神し祀り、毎朝の御米・御水を取り替え、お祈りし、祝詞も唱えるようになり、お祈りする中で強く神様の存在を感じるようになった。

この頃より、仏心ではなく、仏神だと強く感じ、仏神宗仏神寺柳山神社としての石塔を建て毎日の行に入る。

産土の大神は、瓊瓊杵尊（にぎのみこと）であり、柳山の霧島権現社（瓊瓊杵尊）を招神したのが、祖父である、松永浅右衛門である。松永浅右衛門の年齢から推測すると、大正末期〜昭和初期頃に、松永浅右衛門が、柳山で炭焼き小屋を始めるにあたり、地主であった青崎氏と松永浅右衛門が二人でリヤカーを引き、霧島神宮に詣で、小石祠に瓊瓊杵尊を分神して頂き、往復八日間掛けて招神し、柳山にお祀りしたものである。

自宅の敷地内にある小岩（高江町七〇八〇番地一一）に、春に柳山から、降りて来られて、休息する、山神様が
いる。

その山神様は、高江町瀬戸地六九四五番地の日枝神社の方に逗留される山神様であり、その山神様の正式名称は柳
山大山祇大神（やなぎやまおおやますみおおやまがみ）と申される神様である。元々は、この山神様は、

高江町の南方神社は（旧称）諏訪上下大明神 諏訪大明神社 諏訪神社（慶長の役、島津義久が先勝祈願をしたと
言われている。慶長（一五九六年）以前より建立されていたが、創建年は不明。名称変更の期日は不明）、その高
江町二二五五番地の南方神社から、一六八〇年に、大山祇神（山神）様を、鮫島嘉太郎が、

石塔に分神し、高江町瀬戸地六九四五番地の、日枝神社として建立した、古来よりこの地を守る山神様である。

しかし、高江町瀬戸地六九四五番地の、日枝神社は柳山に上る為の道があった、現在は使用されていない、旧道に
建立されている為、松永行秘が、小岩のある新道の方に、移魂建立させたものである。

このような御縁で、仏神宗 仏神寺 柳山神社の主祭神仏は、大日如来、不動明王と、

この大宇宙の最高神、創造神で在られる、造化三神の、天之御中主大御神（あまのみなかぬしおおみかみ）、高皇産霊大御神

（たかみむすびおおみかみ）、神皇産霊大御神（かむみむすびおおみかみ）及び、天照大御神（あまてらすおおみかみ）、産土の大神の瓊

瓊杵尊（にぎのみこと）、柳山大山祇大神（やなぎやまおおやますみおおやまがみ）の、六神一仏一明王をお祀りし、

二〇一九年（令和元年）に松永行秘が、仏神宗 仏神寺 柳山神社として創建したものである。

[illegible]

本電子書籍、

【仏神宗仏神寺柳山神社 祝詞經典集】

は、著作権法によって守られています。

本電子書籍に対しての著作権侵害にあたる行為は、分かり次第取締当局へ通報させて頂きま
す。

著作権侵害は犯罪であり、被害者である権利者が告訴することにより侵害者を処罰してもら
うことができます（親告罪。一部を除く）。著作権、出版権、著作隣接権の侵害は、十年以
下の懲役又は壱千万円以下の罰金、著作者人格権、実演家人格権の侵害などは、五年以下の
懲役又は五百万円以下の罰金などが定められています。また、企業などの法人による侵害の
場合（著作者人格権侵害、実演家人格権侵害を除く）は、三億円以下の罰金と定められてい
ます。さらに、私的使用目的であっても、無断でアップロードされていることを知ってい
て、かつダウンロードする著作物等が有償で提供・提示されていることを知っていた場合、
そのサイトから自動公衆送信でデジタル録音・録画を行うと、二年以下の懲役若しくは二百
万円以下の罰金が科せられます

なお、「懲役刑」と「罰金刑」は併科されることがあります。

また本電子書籍の、著作物のコピー・印刷・転送等を行う事も著作権侵害に適用
されますので、ご了承下さい。

仙神寺柳山神社国際人権擁護協会出版

製作日 平成三十一年一月吉日

印刷日 令和五年六月吉日

著作者 松永行秘

出版日 令和五年六月三十日

第一節

お宮参り・七五三の儀

清祓式開場祝辞祝詞

(きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと)

かけまくも かしこき はらひどの おおかみと たたえことを へまつる
 せおりつひめのかみ はやあきつひめのかみ いぶきどぬしのかみ
 はやさすらひめのかみ よはしらを はじめまつりて
 あまつかみ やおよろずくにのかみ やおよろずこれの はらひわざを
 たいらけく やすらけく きこしめせと かしこみ かしこみも まをす。

修祓の儀

(しゅばつのぎ)

はら ぐし
 祓い串で、かんけいしや
 関係者を祓い、かいじょうぜんたい
 会場全体を祓う。はら

▲記号が表示されていたら、光明真言を三遍復唱する事

かいしきねん

開始祈念

※別紙 記載あり

先ずは神様をお呼びする。

降神の儀（こうしんのぎ）

二拝 九拍手

※二拝九拍手（祈念）一拝は、最高神、天之御中主大御神様に捧げる最も良い数である、九は最高の数であるがゆえに、最高神を呼ぶのに最も良い数、九回の拍手打つ。

本当の御名前は、ミナカヌシ様ですが、アメノ、アマノは、総称です。

アメノミナカヌシオオミカミ、アマノミナカヌシオオミカミと呼ばれているが、どちらも正解の呼称であります。アマノミナカヌシオオミカミと唱えても、ミナカヌシと唱えても効果あり。

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

とゆつくり三回唱え、

み	み	み
な	な	な
か	か	か
ぬ	ぬ	ぬ
し	し	し

とゆっくり三回唱えて、唱えた後に、

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

一 拜

降神の儀（こうしんのぎ）

二拝 二拍手

うぶすなのおおみかみ
うぶすなのおおみかみ
うぶすなのおおみかみ

とゆつくり三回唱え、唱えた後に、

○オーと、一息でゆつくり唱える。○オーと、一息でゆつくり唱える。○オーと、一息でゆつくり唱える。

一拝

大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）「げんだいごやく」

言葉に掛けて、申し上げるのも、恐れ多い、天地根源の神様で在らせられる、天之御中主の大御神、高皇産靈の大御神、神皇産靈の大御神達の、不思議で絶妙な、御恩恵によって、この世に生まれ出てきた、我々の、身の上ならば、その御恩恵に、報い奉ろうとして、御称え、申し上げますには、いよいよ高く、底知れぬ、天上界の、幽界を、主宰され、始めもなく、終わりもなく、盤石に、永遠に、御鎮まりになられて、目には見えない、根源のエネルギーは、百種類に近い、神のエネルギーを、生じ給い、目に見えるものは、昼の世界、夜の世界を、主宰され、またこの地球にあっては、現代を、生きる人を始め、呼吸をする生き物も、呼吸をしない物も、この世に、ありとあらゆるものの限りを、生み出し給い、支配され、御守り下さり、幸をお与え下さる、ご功績の、偉大で、悠久で、広くて、厚い、大きな愛情を、蒙って、この現世に、生きている限りは、大御神様達の、元となる、御心そのままに、この真心を尽くさせて、頂いて、怠慢にならず、尊敬し、畏怖の気持ちで、お仕える様子を、御心も穏やかに、お聞き下さいまして、全世界の人々を、天地の神理に違わず、開けた世の中に、後れることなく、さまざまな災難が無く、つつがなく、存在させて下さり、夜も、昼も、昼夜分けず、御守り、御恵み下さり、幸をお授け下さい、と、大空を、遙かに、拝ませて、頂きます、と、申し上げます。

大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）

※この祝詞は神前でも唱え、無形の空を仰ぎ奏上する祝詞です。

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみたちの くすしく たえなる

みたまの ふゆによりて この うつしよに あれいでたる みにし あれば

そのもとつ みめぐみに むくい たてまつらむとして

ただへごとを へまつらくは いやたかく そこひなき

たかまのはらの かくりよを しめ たまひ

はじめもなく おわりもなく ときはに かきはに しづまり まし まして

めにみえぬ もとつけは ももたらず やその かみけを なし たまひ

めにみゆるものは ひのみくに つきのみくに ほしのみくに
またこれの おおつちに ありては

うつしき あおびとくさを はじめ いきあるも いきなきも よにありとし
あるものの かぎりを うむしいで うしはき まもり さきはえ たまえる
みいさおの おおき ひさしき ひろき あつき おおむ いくしみを
かがふりて このうつしよに あらむ かぎりは

おおみかみたちの もとつ みこころの まに まに

この こころを つくして うむことなく

この みを つとめて おこたる ことなく

うやまひ かしこみも つかえまつる さまを たひらけく やすらけく
きこしめして よよのくにの あおびとくさをして

あめつちの かみわぎに たがは しめず ひらけ よにおくれ しめず
くさぐさの わざわいなく つつがなく あらしめ たまえ

よのまもり ひのまもりに まもりめぐみ さきはえ たまえと

みぞら はるかに おろがみ まつらくと もおす。

産土神祓祝詞

(うぶすなのかみのはらいのりと)

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみ

かけまくも かしこき あまてらす おおみかみ うぶすなのおおかみ

ちんじゅのおおかみを はじめ

いとも ありがたき わがしゅごの ごそんざい たちの

おおまえを おろがみ まつりて かしこみ かしこみも まをさく

おおかみさま ぶっそん たちの

たかき とうとき こうみようを いつも いただき

ひろき あつき みたまのふゆと ごぶつとくを

うみの この いや つぎつぎに たまわり めぐみ たまひ

われは てんちしぜんの どおりにしたがい おかげさまの ところを もちて

われの じんせいを たいせつにして われとかぞくを ねぎらい

はげまし かんしゃして ところに えいようを あたえ

なりわいに はげみ てんしよくに ならしめ たまひ

わが いちれい しこんと ところが いや ますますに

せいちょうし ようじょうし ところがけ みすこやかに

よろづの ねがうこと かなえ たまひ

うぶすなの しんぶつは ゆうけん ちようわの しんぶつにて

うつしよを さりぬ のちは たかき れいかいに はいらしめ たまひ

じょうどへと みちびき たまひ

うつしよも かくりよも たのしみ よろびの かわる ことなく

みこころも なごやかに きこしめして まもり めぐみ さきはへ たまひ

いへかど たかく いやたかに いやひろに さかえしめ たまふ ことを

いんよう ちようわ された うつくしき だいしぜんの ちきゅう じんるいの

へいわ はってんの ために つくさしめ たまひ

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろづの かみたたちと ともに

きこしめせと かしこみ かしこみも まをす

天津祝詞（あまつのりと）

たかまのはらに かむづまります

かむろぎ かむろみの みこと もちて

すめみ おやかむ いざなぎの みこと

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに

あれませる はらへどの にじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろずの かみたちと ともに

あまの ふちごまの みみ ふりたてて

きこしめせと かしこみ かしこみ もおす。

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらえのりと）

かけまくも かしこき いざなぎの おおかみ

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに なりませる

※山吹色文字は、読まない、※黒文字だけ読むこと。

※衣服を脱いだ時に成った神々

※杖 つきたつ ふなとの かみ

※袋 ときおかしのかみ

※袴 ちまたのかみ

※左腕輪 おきざかるのかみ

※左腕輪 おきつかひべらの かみ

※右腕輪 へつなぎさびこの かみ

※潮流の中流で清めた時に、黄泉の国の穢れから成った神々

やそまが つひのかみ おおまが つひのかみ

※その禍を直すために成った神々

※帯 みちのながちはのかみ

※衣 わつらひのうしのかみ

※冠 あきぐひのうしのかみ

※左腕輪 おくつなぎさびこの かみ

※右腕輪 へざかるのかみ

※右腕輪 へつかひべらの かみ

かむな おひの かみ おおな おひの かみ いづの めの かみ

※潮流の底で清めた時に、成った神々（上記三神Ⅱ綿津見三神 下記三神Ⅱ住吉三神）

そこつ わたつみの かみ そこつ つのおの かみ

※潮流の中程で清めた時に、成った神々

なかつ わたつみの かみ なかつ つのおの みこと

※潮流の表面で清めた時に、成った神々

うわつ わたつみの かみ うわつ つのおの みこと

※最後に顔を洗った時に成った神々（三柱のうずのみこⅡ三貴子）※黙読する事。

※左目 あまてらす おおみかみ ※右目 つくよみの みこと

※鼻 たけはやすさのおの みこと

はらえど よはしらのかみたちと ともに もろもろの まがこと
 つみ けがれを はらひ たまひ きよめ たまふと もうす ことを
 きこしめせと かしこみ かしこみも もおす

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらへのりと）

かけまくもかしこき いざなぎのおおかみ
つくしのひむかのたちばなのおどの

あわぎはらにみそぎはらひたまひしときに

なりませるはらへどのにじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみけがれ あらむをば

はらひ たまひ きよめ たまふと まをす ことを

きこしめせと かしこみ かしこみも もお

神言（かみごと）

※言霊の大祓祝詞

たかあまはら おのころに かみづまります

すめむつ かむろぎ かむろみの みこと もちて

ち よろづの かみたちを かむつどへに つどへ たまひ

かみはかりに はかり たまひて

したつ いわねに みやばしらふとしきたて

たかあまはらに ちぎ たか しりて

いづの かむたからの おおみこころの まにまに

あまつ かなぎを もとうちたち すえうちたちて

ちくらに おきくらに おき たらはして

あまつ すがそを もとかりきり すえかりきりて やはりに とりさきて

あまつのりとの ふとのりとを のれー、

「むーひと ふた みーよー いつ むゆ なな やー ここの たり ももち よろづ いろはにほへ とー（強）」

かなながら たまちはへませ かなながら たまちはへませ

ひふみ よいむなや

こともちろらね

しきる

ゆゑつわね

そをたはくめか

うおゑ

にさりへて

のますあせえほれけ

ふるべ ゆらゆらと ふるべ

とほかみえみため

きのえ きのと ひのえ ひのと つちのえ つちのと かのえ かのと みずのえ みずのと

はらひ たまひ きよめで たまふ

とほかみえみため

ねうし とらう たつ みうま ひつじ さる とり いぬ い

はらひ たまひ きよめで たまふ

とほかみえみため

かん こん しん そんり こん だけん

はらひ たまひ きよめで たまふ